小泉八雲活かした焼津市の活性化に関する研究Ⅱ
—焼津&八雲ＹＹプロジェクト—

静岡県立大学 国際関係学部 細川光洋ゼミ
指導教員：教授 細川光洋
参加学生：原田幸枝、青島沙紀、佐々木真子、鈴木麻友子
平松里苗、倉田麻有、生熊美汐、澤野華世子
阿部風香、伊澤芳美、魚取あすか、奥野華純
金子美生、狩野諒奈、小林美紅、榛葉佳奈
守屋佳奈

１．焼津&八雲ＹＹプロジェクト（継続課題）

『怪談』で知られる文学者小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、晩年、夏の避暑地としてしばしば焼津を訪れ、家族とともに水泳などをして過ごした。八雲は、焼津の風物や伝承をもとに、「焼津にて」「乙吉のだるま」「漂流」等の作品も残している。焼津小泉八雲記念館における展示をはじめ、小泉八雲顕彰会による顕彰も継続して行われているが、八雲にちなむ土産物が地元でほとんど企画されたことがないなど、地域とのつながりという面では課題があった。

こうした現状をふまえ、昨年の夏、静岡県立大学細川光洋ゼミ（日本近代文学専攻）と焼津小泉八雲記念館、焼津市観光協会の三者の連携によって立ち上げたのが、「焼津&八雲ＹＹプロジェクト」である。小泉八雲とその文学作品を「地域の文化資源」としてとらえ、文学を通して地域の魅力を広く発信していくことを目指している。また、八雲作品の重要なモチーフである「妖怪」を緒口として、学生たちの柔軟な発想力をもとに、これまで文学に関心のなかった若者層へのアピールを図ることもねらいとしている。

本年度は昨年の実績をふまえて、地域と連携したプロジェクトを継続・発展させ、その成果発表となる秋の焼津小泉八雲記念館開館10周年記念シンポジウム「地域資源としての文学」の開催を目標に活動を行った。

２．研究の目的

本研究は、「地域資源としての文学」をプロジェクトテーマに、焼津市ゆかりの作家小泉八雲と地域とを結びつけ、新しい地域デザインに取り組み、焼津市の潜在的な魅力を発掘し、活性化させることを目的とする。

２年目となる本年は、地域ＮＰＯ法人や自治体と連携し、外部への発信力を持つプロジェクトへの展開を目指した。

３．研究の内容

本プロジェクトが昨年来課題として取り組んでいるのは、以下の２つ点である。

○小泉八雲に関連した焼津の特産品がない。〔PRできるグッズがない〕（観光協会）
○焼津小泉八雲記念館を訪れる来場者のほとんどが年配層であり、若者層の関心を高めたい。（記念館）

以上の課題に取り組むために、①小泉八雲にちなんだ商品の開発提案、②八雲作品と地域とを結びつける学生による朗読会などのイベントの実施、を行うことを決定。この企画方針に基づき、以下の**4. 成果**(2)のような活動を行った。本年は、ＮＰＯ法人浜の会や焼津市役所との連携により、地域のニーズ（地域から求められているもの）に応えるかたちで企画を立案した。

また、企画提案を充実させるために、八雲作品をゼミで読み込み、焼津の八雲ゆかりの地を実際に歩くフィールドワークを行っている。単に調査するだけでなく、そこでの「気づき」を具体的な提案・行動に繋げていくことを心がけてプロジェクトに取り組んだ。

４．研究の成果

(1) 当初の計画

昨年度からの継続課題であるため、当初の計画通り４つの取り組み課題をほぼすべて実施することができた。「商品開発」「朗読会」の企画の他に、シンポジウムの実施と併せて「八雲焼津文学散歩コース」の冊子制作を考えていたが、今回はシンポジウム自体の内容の充実を優先させた。「文学散歩コース企画」については、次年度に実施する継続課題としてすでに計画の検討を行っている。これについては、**(4) 今後の改善点**に挙げた。

(2) 実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ａ：予定どおり

「商品開発」「朗読会」については以下のように実施し、外部からの評価も得ている。なかでも、焼津市役所若者倶楽部と共同制作を行った「やいちゃんLINEスタンプ」の商品化（八雲妖怪担当）、「地域資源としての文学」をテーマに松江の学生たちを招聘して行ったシンポジウムのパネルディスカッションは、成果を地域に発信し、還元するという意味で手応えがあった。実施プロジェクト全体としては、「Ａ評価」としてよいと考えている。

(3) 実績・成果

「焼津&八雲ＹＹプロジェクト」の本年度の主な活動実績は、以下の通り。

①朗読会「八雲で奏でるYaidzuノスタルジー」 の開催（於．焼津小泉八雲記念館）

６月24日（土）に、焼津小泉八雲記念館開館10周年記念事業として開催。焼津にちなんだ八雲作品「焼津にて」「漂流」を、箏曲の伴奏附で披露した。浪音や亡霊の声など、演出を工夫し好評を得た。また、この朗読会において昨年度ゼミで作成した「八雲手拭い」「妖怪手拭い」の市販化を発表、併せて販売を行った。朗読会の模様は「静岡新聞」6/26朝刊に写真入りで紹介されている。

②「焼津浜通り 第10回夏のあかり展」での朗読会並びに妖怪行燈８基の制作出展（於．焼津 常照寺）

８月５日（土）焼津浜通りで開催される「夏のあかり展」で朗読会を開催。「焼津にて」「耳なし芳一」を県大箏曲部の協力のもとに朗読した。また、主催するＮＰＯ法人浜の会と共同で行燈制作を行い（７月）、八雲の妖怪行燈８基を出展した。朗読会については、「日経新聞」8/19朝刊に写真入りで紹介されている。

③「やいちゃんLINEスタンプ」の焼津市役所との共同制作〔５月～８月〕

焼津市役所若者倶楽部、イラストレーター・徳田有希氏と共同で、焼津市のマスコットキャラクター「やいちゃん」をもとにしたLINEスタンプを制作。細川ゼミは八雲の妖怪と「やいちゃん」のコラボデザイン10ヶを担当した。八雲の妖怪をLINEスタンプ化することは、昨年秋の公開プレゼン以来提案してきたことであり、継続した活動が評価され、実を結んだといえる。「やいちゃんLINEスタンプ」の制作については、８月７日（月）に焼津市役所で制作発表会を行い、「静岡新聞」8/8朝刊に写真入りで紹介された。

④シンポジウム「地域資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」の企画・開催（於．焼津市文化会館小ホール）

10月８日（日）小泉八雲来焼120周年と焼津小泉八雲記念館開館10周年を記念して開催。第一部は紺野美沙子による朗読会。第二部のシンポジウム・パネリストとして学生が登壇し、ＹＹプロジェクトのこれまでの取り組みを紹介、島根県立大学短期大学部「ゴーストみやげ研究所」の学生とともに事例発表を行った（司会進行は細川）。八雲の曾孫である小泉凡氏、八雲研究者の梅本順子教授（日本大学）、焼津小泉八雲顕彰会会長の松永六郎氏を交えたディスカッションで「地域の文化資源」としての小泉八雲に光をあて、松江-焼津の連携をもとに、全国の八雲ゆかりの地（熊本・神戸）が連携して魅力づくりをすすめる「八雲タウン」構想を提案した。

当日の参加者には、八雲の『妖魔詩話』のスケッチをもとに学生が制作した「妖怪クリアファイル」を、ノベルティグッズとしてレジュメとともに配布した。シンポジウムについては、「静岡新聞」10/13朝刊の一面コラム「大自在」でも話題として採り上げられている。

(4) 今後の改善点や課題

(1) 当初の計画項でもふれたが、地域と八雲文学とを結びつける「八雲焼津文学散歩コース」（ゴーストツアー）企画、および冊子づくりが課題として残っている。この「文学散歩」企画については、焼津小泉八雲記念館に藤枝市郷土博物館・文学館（藤枝市）、中勘助文学記念館（静岡市）をあらたに加え、「駿河の文学３館めぐり」（仮称）のバスツアーとして、静岡市文化振興財団とともに2018年秋の実施を計画している。焼津での活動を核に、周辺地域と連携することで「地域の文化資源」としての文学の可能性をさらにひろげていきたいと考えている。いわば文学を地域の観光資源として活用していく試みである。2018年春には静岡空港からＦＤＡ静岡－出雲便の就航も始まり、「小泉八雲」による松江との連携もいっそう深まることが期待される。

現在、小泉八雲の焼津に関する作品をまとめて読むことができる本がない。「文学散歩コース」の企画とともに、八雲の作品が地域で読み継がれていくための基盤づくりが今後の課題といえよう。単に観光資源として活用するだけでなく、焼津において小泉八雲の知名度を高めることが、プロジェクトの推進には不可欠であると考えている。

５．地域への提言

秋に開催したシンポジウム「地域の資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」では、全国の八雲ゆかりの地（松江・焼津・熊本・神戸）が連携して魅力づくりをすすめる「八雲タウン」構想を提案した。ＦＤＡ静岡－出雲便の就航は、「小泉八雲」を共通の文化資源として持つ焼津にとっても大きな情報発信のチャンスといえる。松江の地域づくりプロジェクトを一つの先行事例として、焼津発のオリジナリティある企画がのぞまれる。

また、近年「文豪とアルケミスト」の人気を契機として、若い世代も文学の「聖地巡礼」に高い関心を示している。首都圏に近い焼津は、小泉八雲ゆかりの地として魅力ある場所である。学生たちのアイディアも十分に活かせる領域であろう。

６．地域からの評価

昨年度から活動を行ってきたこともあり、地域からは活動への理解と一定の評価を得てきた。ＮＰＯ法人や自治体との連携も、来年度に向けて継続して進んでいる。

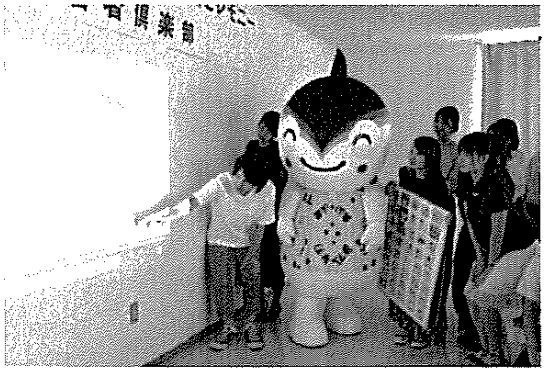
「焼津&八雲ＹＹプロジェクト」はアウトリーチ活動の一つとしてTwitter（八雲焼津プロジェクト）を利用し、活動のツイート（発信）に対して多くの励ましの言葉をいただいている。

https://twitter.com/y_y_project

これらの成果をもとに、次年度以降も「責任を持った提案」ができるプロジェクトとして、地域とともに課題に取り組んでいき、期待に応えたいと考えている。

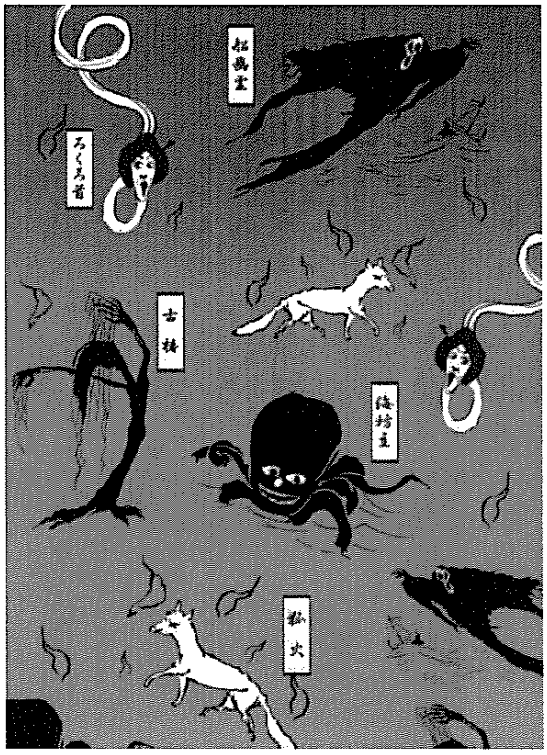
〈焼津&八雲ＹＹプロジェクト 2017〉

8/5 「第10回夏のあかり展」八雲作品朗読会
（焼津市浜通り 常照寺）



8/7 「やいちゃんLINEスタンプ」制作発表会
（焼津市役所）

10/8 シンポジウム「地域資源としての文学～小泉八雲による地域づくり～」パンフレット



八雲のスケッチによる「妖怪クリアファイル」
（シンポジウムのノベルティグッズとして制作）

ふじのくに地域・大学コンソーシアム
地域貢献推進事業　成果報告書

岡部宿大旅籠柏屋の活性化に関する研究

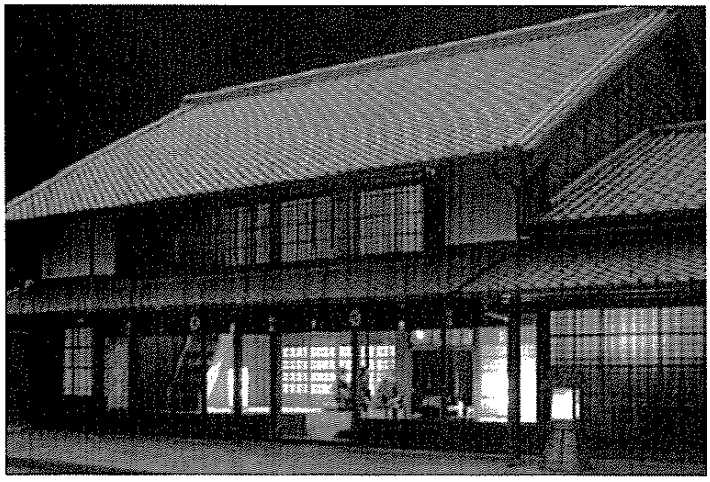
静岡産業大学　情報学部　小出ゼミ
指導教員：教授　小出雅俊
参加学生：坂下大智、望月峻介、勝又俊幸
草垣光希、齊藤由華、鈴木雅也
髙木僚太、八木済、シュウ亜蘭

1．研究の概要

藤枝市岡部町にある大旅籠柏屋は、国の登録有形文化財であるが、現在は資料館として運営されている。その施設の運営状況を把握した上で、その抱える問題点を抽出し、分析を加えて、課題を検討し改善策を作成した。藤枝市民をはじめとして、その認知度を向上させるとともに、特に若者を中心とした集客増を目指す。認知度の向上、若者の来客数の増加の方策を具体的に考え、施設の活性化について具体策を提案したい。

私たちが考えた活性化のためのキーポイントは以下の３点である。

① 施設の認知度の向上
② 若者の来客数の増加
③ 外国人観光客の誘致



2．旅籠とは

旅籠という言葉は、江戸時代の旅に使用した馬の飼料を入れる籠がその由来である。それから、旅人の食糧等を入れる器を意味するようになり、転じて宿屋で出される食事の意味になった。その後、食事を提供する宿屋のことを旅籠屋、略して旅籠と呼ぶようになった。

江戸時代の街道には、宿場ごとに多くの旅籠があって、武士や一般庶民の泊まり客で賑わった。次第に、接客用の飯盛女を置く飯盛旅籠と、飯盛女を置かない平旅籠に別れていった。現在でも、旧宿場町の同じ場所で昔のままに旅館を営んでいるところは数えるほどしかない。混雑時には相部屋が求められ、女性の旅客は難儀をしたとされる。

旅籠の規模で大旅籠、中旅籠、小旅籠と分類される。今回、活性化を目指す柏屋は大旅籠とされている。[1]

3．大旅籠柏屋の概要

大旅籠柏屋は、現在、岡部宿公園となっている本陣跡地に隣接している。
近くには、静岡では有名な酒造会社のひとつである「初亀醸造株式会社」がある

大旅籠柏屋の建物は、1820 年の文政年間と、1834 年の天保年間の過去に 2 度ほど大火に見舞われており、現在の建物は 3 代目の建物となっている。[2]　1834 年の大火を受け、1835 年 10 月 19 日に上棟し、翌年の 1836 年 4 月 11 日頃に完工したとの記録が残されている。再建に要した費用の内訳などの詳細な記録も存在している。[3]

現在、旅籠内ではボランティアガイドが柏屋の歴史、建物の造りになどについて説明してくれる。また、1998 年に国の登録有形文化財に認定された。柏屋が公開されたのは、2000 年 11 月頃からである。

4．その現状と課題

四季ごとにイベントが開催され、その内容も工夫されている。冬期限定のイルミネーション等もあり、来場者の目をたのしませている。

この施設は、2000 年に公開されたのでとても綺麗である。しかし、近くの駐車場にある大旅籠柏屋の看板が廃れているのは改善を要する。春のひな祭りや夏祭りの入場者数は多いが、それ以外の時期の来場者数が少ない為、一年を通して増やすことが課題である。

また、外国人への対応がほとんどされておらず、案内や説明も日本語表記のみとなっている。その為、外国人が来場したとしても、この施設を理解し楽しむことが難しい。

イベントを多く開催しているものの、藤枝市民の知名度自体が低い。また、イベントに参加するお客さんは高齢者や地域の方が多く、若者の参加者が少ない。

---

[1] ja.m.wikipedia.org/wiki／岡部宿　2017. 10.19　閲覧
[2] Ja.m.wikipedia.org/wiki／旅籠　　2017. 10.19　閲覧
[3] www.surugawan.net/guide/28.html 2018.1.13　閲覧

・柏屋の駐車場にある看板が廃れている。

5．具体的な改善策(案)

5－1．認知度の向上に向けて

案①　地域の大学などと連携してパンフレットを造り、広く配布する。
大学に依頼することで、経費も比較的抑えられる。ゼミ研究などで学生対象に調査を依頼する。

案②　駅前等のイベントで柏屋のブースを作り、柏屋の説明などを行い宣伝する。

案③　興味深いイベントをさらに多く企画する。

<u>新イベント案</u>

1）お化け屋敷
会場を柏屋で行い、会場装飾を地域の方々に協力してもらう。地域の子供たちを対象に行う。岡部の夜は明かりが少なくとても怖い。

2）バーベキュー（ＢＢＱ）の会場として柏屋を使う
中庭などに設備を設け、BBQ 会を開催する。集団で行うので、人が集まり賑やかになる。

3）凧あげ大会
地域の子供、高齢者を対象に凧あげを定期的に開催することで、自然に子供の集まり場となることを狙う。

4）フリーマーケット
地域の方々の協力で開催する。同時に柏屋もブースを設け、来場者に施設概要の説明などを行う。

5）星を見る会
岡部の夜空はとても綺麗なので、星を眺める会を開催する。秋冬に空気が澄んで星がきれいに見ることができる時期に企画する。

6）お月見会

星を見る会と同様、月を見る会を開く。餅つき大会なども同時に行い、団子なども提供できればよい。

7）　マラソン大会

蓮華寺池公園を貸し切り、マラソン大会を開催する。経路やゴール等で柏屋のエリアを作り、柏屋の認知度向上を図る。または、柏屋周辺をマラソンコースの経路やゴールに利用し、認知度を上げる。(マラソンではなく、ウォーキング大会でも可)

8）初亀酒造の日本酒飲み比べ大会

初亀酒造に提供していただき、日本酒の飲み比べを柏屋で実施する。初亀酒造のお酒を認知してもらうとともに、柏屋を堪能してもらう。

５－２．若者の来客数の増加

案④　小中学校でのイベントチラシ配布、クーポン券の発行。

案⑤　柏屋の instagram など SNS のアカウントを作成し、若者対象にイベントなどの情報を拡散させる。

５－３．外国人観光客の誘致

案⑥　外国人向けに、多言語のパンフレットを作成し、静岡空港などで積極的に配る、または、案内所等に置いておく。ＪＲ静岡駅、日本語学校など外国人が集まる場所でパンフレットが入手し易いように配布しておく。外国人スタッフを起用することも有効であろう。

８．まとめ

私たちは柏屋について研究を進めるに従って、この施設の重要性を深く理解していった。このような過去の歴史の面影を伝える素晴らしい施設が、来場者数が少なく、また認知度が低いことに大きな疑問を感じた。毎月のイベントに加えて、藤枝市の食材を用いた料理などがあれば、ひとつの魅力となる。この施設を、まず多くの藤枝市民の方々に知ってほしいとの思いが、研究を進めるごとに増していった。

この研究の成果と発表が、藤枝市民をはじめとして、多くの人々にその魅力が知られることの契機となれば、望外の喜びである。

以上

川根本町の木材を活用した地域創造

静岡文化芸術大学　デザイン学部　黒田ゼミ
指導教員：教授　黒田宏治、教授　佐井国夫
参加学生：安藤かすみ、宮本伶美、吉野晞

1. 要約

川根本町は、静岡県中部に位置する町である。2,000m を超える山々が連なる南アルプス国立公園の最南端に位置し、町域の 9 割を森林が占め、大井川が町の中央を南北に流れている。年々人口の減少、高齢化が進む中で、町内の山々を管理・継承していくのが難しい現状である。これを踏まえ、今回は川根本町役場・関連団体との協力を得て、我々学生が町の木材資源の利活用方法について、若者目線、またデザインを学ぶ学生目線から調査・検討し、木材資源の可能性を企画・提案した。

2. 研究の目的

川根本町・関係団体との連携・交流のもと、デザイン系学生による地域資源の調査・評価等を行い、木材資源の利活用の可能性を企画・検討する。若者をターゲットに木材加工製品に加え関連応用、プロモーション活動も視野に入れた。

3. 研究の内容

(1) 参加学生による現状資料調査からの川根本町における木材資源利活用の課題、調査視点の抽出・検討。

(2) 参加学生による町内現地調査（観察、体験、取材等）や他地域参考事例調査を行い、商品企画・販促アイディア展開をした。また、川根本町・関係団体との連携グループ活動も検討。

現地調査期間：9 月 25～26 日、 前田製函所、中澤製函所、インテリア茶箱、木の駅等
11 月 15～16 日、観光協会、南アルプスあぷとセンター、教育委員会等
1 月 12～13 日、 木の駅、森のコテージ周辺の森林等

(3) 木材加工商品企画案（パッケージ、紙関連等も検討可能性）、木材利活用プロモーション展開案（コミュニケーションツール、イベント等）のデザイン制作（一例として）。

4. 研究の成果

本研究では、参加学生が各自、川根本町の木材資源を利用した、木材加工商品を企画・提案する。参加学生チームによる現状資料調査から町内現地調査を行った後、各自、課題の抽出・検討を行い、再調査を経て、それぞれの企画・提案を行う。参加学生チームの内、2 名は川根本町で近年増加傾向にある若年層観光客向けの土産物を木材資源、それらの廃材を利用した木材加工製品として提案する。もう 1 名は町内の若者をターゲットに、教育の観点から川根本町の自然や木材について知ることのできる絵本を制作する。次頁から、各自の調査結果、課題提案、成果物に至るまでの過程、成果物について、今後の改善点等、各自でまとめたものを記述する。

川根本町の間伐材を利用したお土産・ミニワークショップの提案

静岡文化芸術大学　デザイン学部　3年
安藤かすみ

①現地調査、資料調査による課題の抽出

現在、川根本町にある木の駅かわねでは、「森林の整備促進、地域通貨による地域経済への貢献」「集落、茶園周辺の環境改善の促進」「小規模、副業的自伐林業の復活への足掛かり」を目的として間伐材の集荷を行っている。現在までの集荷した間伐材はほぼ島田市内にあるチップ工場に引き渡しており、町内での消費には結びついていない。また、観光に関して、平成 26 年以降観光客数は増加し続けている。近年では、SNS 利用率の増加に伴って夢の吊り橋が人気となり、20 代女性の観光客が増加した。

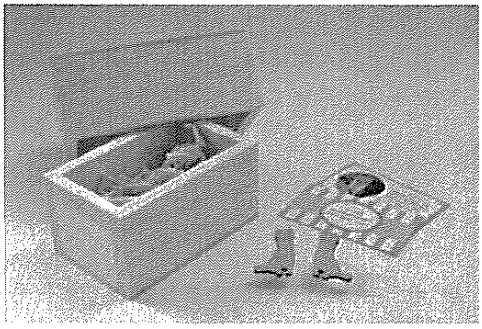
そこで、川根本町の森林資源と観光の相互作用によって、町内での木材の利活用促進につながるのではないかと考えた。

②提案内容

20 代女性をターゲットとした、間伐材を利用したお土産とミニワークショップの提案を行う。

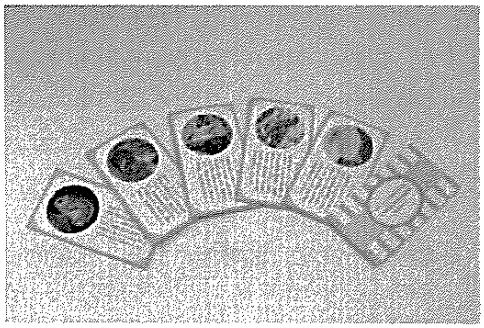
お土産

動物をモチーフとした木のイヤリング・ピアス。基本的な種類はライチョウ（夏毛・冬毛）・オコジョ・モモンガ・ニホンリスの計 5 種類で、これらは全て川根本町に生息している動物である。他に、葉型や雪の結晶型など自然を表したパーツがある。パッケージには、川根本町で昔から作り続けられている茶箱をミニサイズにしたものを使用する。



ミニワークショップ

左右のパーツを自由に選び、自分でアクセサリーパーツとの接着や連結を行う。絵具を用いて色を付けることもできる。お土産やの一角に小さなスペースを設け、気軽に使えるようにする。



③今後の展開・課題

間伐材をお土産として利用して町内で消費することで、地域内での経済活動の活性化させることが可能になると考える。

今後は、ネックレスやブローチなどへの展開、パーツの種類の増加を考えている。また、販売場所と同じ場所でミニワークショップを行うため、場所の選定が重要となる。

川根本町の間伐問題について川根の木の廃材を使った提案

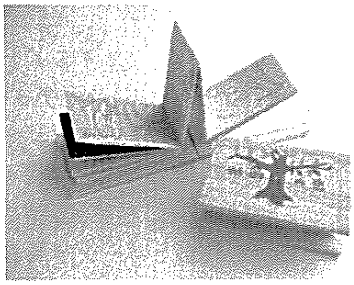
静岡文化芸術大学　デザイン学部　3年
宮本伶美

①提案内容

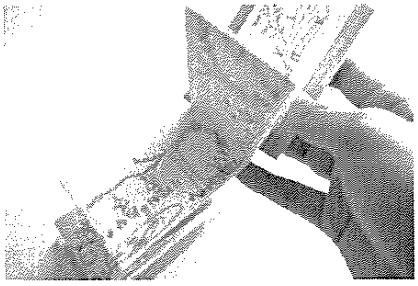
川根本町の地域の産業復興、雇用創出するには、まずその土地に住む子どもたちに現状をしってもらい、木の大切さを感じてもらうことが必要ではないかと考える。
実際に川根本町教育委員会の方々に、子どもたちが木と触れ合う機会があるのか調査をした結果、「川根本町ふるさと発見団」や、「海の子・山の子交流教室」などのイベントが多数あり、小学5年生では総合学習で川根の木について学ぶことがわかった。しかし、小学5年生までは、親や子どもたちが自主的に動かなければ体験できないことが多い。そこで、小学校低学年の子どもたちに日常的に川根の木の大切さを感じてもらいたいと考える。

②成果物

絵本をつくる。
内容について
表 川根本町によく生えているスギの木を主人公にした間伐問題をテーマにしたストーリー。
物語の登場人物には、川根本町に住む動物たち(カモシカやライチョウ)が登場する。



裏 森の楽しさを遊びながら感じてもらえるように、森のイラストの中にいろいろな顔をちりばめて、それを想像、発見できるようにした。
また、川根にゆかりのあるいろいろな昔話のイラストも登場させ、川根の伝統も学べるようにした。



小学校の各教室、図書館に置き、日常的に木と触れ合う機会をつくる。

③今後の課題

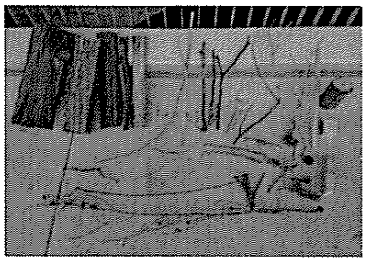
今回の提案は、まずは地元の子どもたちから川根本町の間伐問題について理解を深めてもらいたいということだったので、次に地元外の人たちにいかに興味をもってもらえるかが課題になってくると考える。
対策としては、お土産として絵本を売り、観光客の人々にも川根本町の間伐問題を少しずつでも知ってもらえる機会を増やしていく必要があると考える。

廃材を使用した若者向けの川根本町土産 ー「香り」のデザインー
『カヲルカワネ』

静岡文化芸術大学　デザイン学部　3年
吉野晞

①　背景・調査結果

近年、「夢の吊り橋」等の影響で、川根本町には多くの若年層観光客が訪れるようになった。しかし、多くの若者達は目的地を訪れた後、川根本町に留まらず、すぐに次の目的地へ行ってしまう。そのため、若者達がもっと町に触れてみたいと思うきっかけになるような話題性のある製品を作りたいと考えた。私が現地調査で川根本町「木の駅」を訪れた際、鉋をかけた後の廃材や木屑は燃やすか肥料にするだけの使い道しかないということを知った。しかし、これらはとても香りが良く、木は種類によって様々な香りがある。そのため、〈木の香り〉という新たな視点で、木材加工製品の提案をしたいと考える。



②　課題提案・目的

木材資源の廃材を利用した、若者向けの香りを使った土産物の提案ということで、私は様々な検討の結果「モビール型ディフューザー」を企画・提案する。香水やディフューザーのように「香り」は若者にニーズがあると考え、また香りは記憶力とも密接に繋がっていることから、土産物に活用するには最適の効果だと考える。廃材を使用することで、川根本町の間伐材利用や木材の活用方法についての新しい提案となるように提案する。

③　成果物について

縦横10cm程度の置き型モビールを制作する。若者が魅力を感じ、手軽に購入しインテリア・旅の思い出として楽しんでもらえるものを目指す。川根の代表する自然（木々と星空）をモチーフに、木の香りを抽出した液体ボトルもセットにすることで、木の香りを使用したリラクゼーション効果と川根本町の思い出を見た目と香りで楽しんでもらう。販売場所は川根本町の土産物屋や駅、旅館等を想定。製品は香りの特に良い、ヒノキ・サクラ・カシワの3種類で企画する。

④　今後の課題

もう一つの川根本町名物「お茶」等とコラボレーションできないか検討。また、川根産の木が町を循環し、活性化できるようなシステムにこの製品をどう組み込むか検討が必要。

成果報告書

川根本町指定課題
「魅力あるグルメ（食）・土産・特産品で町の魅力アップ」に関する研究

静岡大学 農学部 藤本ゼミ
指導教員：准教授 藤本穣彦

参加学生：吉田美音子、荒木智遥、小林純也、榊原拓海、杉山喜一、中山峻弥、飯島大、江頭泰寛、小木曽郁弥、小楠邦彦、伊藤江里、川治明以、神澤清、小山ほなみ、杉村直柔、鈴木碧人、角田航輝、田中沙奈、原川麻友、藤來知世、三島真希、水谷新、湯澤孝哉

1. 要約

「農と食をむすぶ地域づくり」を主題として、フィールドワークで得られた内容をSNS情報として、加工、発信する取り組みを行った。住民と学生がローカルな食を共に見直すきっかけとなればと考えた。参加学生は、農村資源計画学を履修する農学部学生22名とティーチングアシスタントの大学院生の合計23名である。学生たちはチームを編成し、川根本町の住民の皆さんと川根本町の食の世界を探検した。プロジェクト共通のハッシュタグとして「#かわねのne」を考案し、さらにチーム名をハッシュタグとして設定した（「#ゆずのいいとこゆずっちゃお」、「#チームBIG」、「#川根ポッポー」、「#川根いいものがち勢」、「#かわ姉さんやんばいです」）。収集した記録はSNS情報として加工し、現在も流通を続けている。

2. 研究の目的

日本で最も美しい村連合の加盟村である川根本町では、住民主役の美食革命が期待されている。本研究では、川根本町の食の魅力アップのために、食と農をつなぐ最も美しい町づくりをすすめる住民主体の形成とネットワーキングを目的とする。参加学生は、地域内連携や美食の発掘、食べ物と食べ方の町内交流をコーディネートし、美食革命を担う地域主体の創生を、SNS情報の発信を行いながら促していく。

3. 研究の内容

川根本町は、日本で最も美しい村連合の加盟村である。世界基準の村づくりを宣言している同町における美食革命もまた世界基準が求められる。町内の日常食を、生産者と調理者の視点から見直す機会を学生がコーディネートすることで、町内の食の地域資源（これまでの地域資源磨きの遺産の発掘を含む）を見つめなおすことから出発したい。グルメや特産品開発のためには、その持続的な担い手の存在が必須であり、町内に永続的な美食革命を担う主体を形成することが、一先ずの到達点となる。そのために、SNSツールを活用した情報発信とネットワーキングを社会実験する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

平成29年9月～平成30年2月の間に、月1～2回の訪問活動を行ない、農林家（生産者）と家庭料理の調理人としての住民と共に食のワークショップを継続的に開催する（9月は予備調査）。平成29年12月には、日本で最も美しい村連合の副資格委員長（品質管理・地域資源開発が専門）を招いた住民学習会を実施する。

(2) A：当初想定していた予定を上回る成果が得られた。

(3) 実績・成果

今年度の研究を開始するにあたり、2017/9/19に川根本町役場で打ち合わせを行った。食の魅力を発掘する際に、住民の情報発信力が弱いとの指摘があった。来訪者の情報発信力を高めることはもちろんだが（よそ者の目、学生の実践）、住民自らが、地域資源を発見し、磨き上げる実践をいかにパッケージ化して発信していくか（日常の発見と喜びの共有）。住民の日常の発見と発信をどのように促し、いかにして情報ネットワークのなかに有機的に位置づけられるのか。このような問いを手がかりに考えていくことにした。

代表者が担当する農村資源計画学は、「地域資源を見つけるまなざしを鍛え、磨く方法を習得する」ことが目標であり、以下のような学習内容を組み立てている講義である。農山村コミュニティの自治と持続性を構築するうえで必要となる、地域資源の保全・活用・開発に関する基本的考え方を獲得し、計画論の手法や技術を習得する。なかでも、再生可能資源（自然エネルギー）とコミュニティ、農と食をテーマに、具体事例を検討しながら、その計画策定、地域主体の形成、事業・政策評価、ネットワーキングの方法を社会実験しながら習得する。

そこで、「川根本町にある農と食の地域づくりを発信する（あるものさがし）」をテーマに、受講生22名を5つのプロジェクトチームに編成し、それぞれのチームで (1) 食との出会いを情報にして発信していく、(2) 情報の流れをモニタリングし、(3) 分析と改善策を提案することを課題とした。

プロジェクト共通のハッシュタグとして「#かわねのne」を考案し、さらにチーム名をハッシュタグとして設定した（「#ゆずのいいとこゆずっちゃお」、「#チームBIG」、「#川根ポッポー」、「#川根いいものがち勢」、「#かわ姉さんやんばいです」）。収集した記録はSNS情報として加工し、現在も流通を続けている。報告会当日は、それまでの時点での情報流通の分析結果を報告する。

(4) 今後の改善点や対策

今回は初年度の立ち上げとして、それぞれのグループの自由度を高め、学生にはSNSツールを利用した社会実験的取り組みを数多くこなしてもらった。「地域の宝」を「発見する」ことと、それを様々なツールによって「磨く」ためにフィールドワークに通い、さまざまな交流を通して学生たちの素直な感想や魅力を発信するという「みつめるまなざし」を鍛え上げることができた。その一方で、地域住民に川根本町のリソースを認識してもらう機会は十分につくることができなかった。

今後は、フィールドワークやSNSツールを利用するなかで、得られたデータからテーマをさらに発展させ、外に向けた単なる観光地化ではなく、地域住民の方々へフィードバックし、地域リソースを媒介に川根本町と学生のちからを相互に発展させたい。フィールドワーク、実践、地域住民の方に向けた成果発表のサイクルをつくり、川根高校へ「川根留学」をしている高校生とも交流を図り、地域への愛着を深める取り組み等を行っていくことも考えたい。

5. 地域への提言

地域の中にいると気付けない「当たり前」のもの、「そんな特別なものじゃないよ」と思っている日常のものが、外から見たときには非常にユニークな土地性の表象であり、魅力あるものであることを楽しんでもらいたい。無理に新しいものをつくったり、手を加えたりする必要はなく、そのままのものをどのように「地域の宝」としてみつめ、磨き、外へ向けて発信しいくのか。そのことで得られるフィードバックを個人ではなくチームで受けとめることはできないか。同町が推進する千年の学校や住民ディレクター養成講座、美しい茶園でつながるプロジェクト（#つながる川根茶）など現在の活動とも共鳴しあいながら、なつかしさ、あたたかさを強みに変えていくことができないか。「今あるものを新しく、同じものを違う視点で」、という考え方で、これからも共にプロジェクトを進めていきたい。

6. 地域からの評価

新しいものを生み出すことが住民の皆さんの総意によって行われ、誰もが関係者として愛着をもつことができるよう、相互に意見を交換したい。そのなかに、学生という外部の要素が入ることは（一先ず出会った限りでは）非常に歓迎している。回数の面でも業種の面でも川根本町と学生のいろいろな人同士が交流し、つながりが生まれたことはたいへん財産になったと聞いた。学生たちだけでなく、住民の皆さんにとっても、よろこびや気づきになった部分があるように思う。川根本町として、これから長く深い付き合いになる足掛かり、きっかけとして大きな成果であったと聞いた。今回スタートした取り組みの成果を単年度ではかるのではなく、中長期的な目線で、これからのことを考えていきたいということであった。今後の継続的な取り組みが大いに期待されている。

成果報告書

若い人にとって魅力のあるまちづくりへの提言

静岡県立大学経営情報学部
藤本ゼミ(研究室)
指導教員：教授　藤本健太郎
参加学生：池戸龍、出雲愛理、栗田優花、
吉川彰莉、櫻井愛弓、竹山航平、花田琴美、
望月玲那

1. 要約

若者にとって魅力あるまちはどのようであるかを袋井市に提言するため、まず若い世代が就職や結婚などの人生設計についてどのように考えているか静岡県立大学の学生103名を対象にアンケート調査を実施した。その集計結果の考察と袋井市の現状から提言を考えた。

2. 研究の目的

袋井市は県内で二番目に高齢化率が低く、若い人が比較的多いまちである。しかし、結婚や就職で転出してしまう場合が多いことが分かっており、日本全体同様に袋井市も人口減少が見込まれている。そのため若い人にとって魅力あるまちはどのようなものなのかを考えるためアンケート調査を行い、その結果と袋井市の現状から、袋井市が若い人にとって魅力あるまちになるにはどのようにすればよいのかを若者目線で提言を行う。

3．研究の内容

静岡県立大学の学生103名(男性45名、女性58名)に行ったアンケート調査を行った。その結果の概要は以下のとおり。

イ）アンケート回答者の出身地と就職を希望する地域

女性 58 名

	静岡県出身	静岡県外出身	計	割合	静岡県内出身者の中での割合	静岡県外出身者の中での割合
静岡県内で就職	45	3	48	82.76%	91.84%	33.33%
静岡県外で就職	4	6	10	17.24%	8.16%	66.67%
計	49	9	58	100.00%	100.00%	100.00%

男性 45 名

	静岡県出身	静岡県外出身	計	割合	静岡県内出身者の中での割合	静岡県外出身者の中での割合
静岡県内で就職	21	4	25	55.56%	75.00%	23.53%
静岡県外で就職	7	13	20	44.44%	25.00%	76.47%
計	28	17	45	100.00%	100.00%	100.00%

男女 103 名

	静岡県出身	静岡県外出身	計	割合	静岡県内出身者の中での割合	静岡県外出身者の中での割合
静岡県内で就職	66	7	73	70.87%	85.71%	26.92%
静岡県外で就職	11	19	30	29.13%	14.29%	73.08%
計	77	26	103	100.00%	100.00%	100.00%

静岡県で就職したいという学生は全体で 7 割、さらに静岡県出身者で静岡県で就職を希望している学生は全体の約 8.5 割であった。

ロ）静岡県に就職を希望する理由

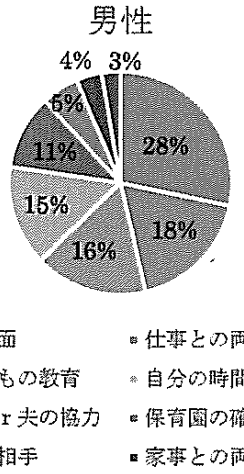
上記のアンケート結果から静岡県内に就職を希望する学生が多数いることが分かった。静岡県に就職を希望する理由としては、実家があるから、住み慣れているから、地元だから、静岡が好き、県大に入学したから、などが挙がった。

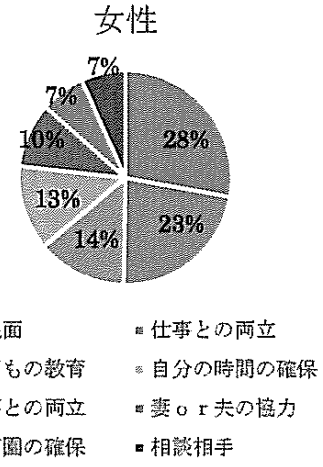
ハ）就職先に求めること

更に学生が就職をするに当たって企業を決める上での優先条件を回答してもらった。その結果、回答が最も多かったのは給与 19%であり、次いで福利厚生 17%、自分が長く続けられるか 14%、職場環境 13%という順番であった。

ニ）出産・育児について

子育てへの不安についての結果は以下の通りになった。





不安要素として挙げられたのは男女共に、1位金銭面、2位仕事との両立、3位子供の教育であった。

4．研究の成果

（1）当初の計画

10月：学生向けのアンケート調査の作成・実施

11月：アンケート調査の集計

12月：アンケート調査の結果分析・考察、提言の作成

（2）実際の内容（A）

10月：学生向けのアンケート調査の作成・実施

11月：アンケート調査の集計

12月上旬：袋井市役員の方と会談

12月中旬：アンケート調査の結果分析・考察

1月：提言の作成

予定どおりに静岡県立大学の学生に対してアンケート調査を行い、意識調査を行った。

予定では袋井市に行き、市役所のスタッフや市内の関連団体との意見交換を行う予定であったが、袋井市役所のスタッフが大学を訪問してくれたため、袋井市における現地調査は実施しなかった。また、アンケート調査結果の分析が学生のみでは十分にできない場合、専門家に謝金を払い、助言を得ることも考えていたが、必要ないと思われたため、学生のみで分析を行った。

（3）実績・成果と課題

静岡県立大学の学生に対してアンケート調査を実施し、静岡県内に就職を希望する学生は、その理由として「実家があるから」、「住み慣れているから」等を考えていることが分かった。また、就職先については給与面とほぼ同じくらいに福利厚生が重視されていることが分かった。さらに、近年、離職率の高い企業はいわゆるブラック企業の疑いがあるとして学生に敬遠されるが、長く働き続けられるような企業であることも学生から求められていることが分かった。

（4）今後の改善点や対策

学生メンバー同士での日程調整を早目に行うべきであった。

アンケートの内容をもう少し具体的なものにするとよかった。

5　地域への提言

地域への提言を以下のとおり、まとめた。

アンケートの集計、分析結果から若者にとって魅力あるまちを作るためには、就職支援や出産子育てへの支援が必要であると考えた。

出産・子育てへの対策としては、「フッピーのぽっけ」という袋井市独自の子育て支援アプリに「他の子育て中の方の日記を読むことができる」といったコンテンツを新たに加えることを提案したい。子育て世代の不安の共有に役立ち、アプリの更なる利用増加につながると考えたためだ。また、袋井市の政策を近年活用が進む SNS を使い PR することでより効果的な宣伝につながるのではという案も出た。

就職支援では、「フッピーのぽっけ」のような袋井市独自の就職支援アプリの開発を提案したい。袋井市内の企業の紹介、企業検索では「給与」「福利厚生」など(アンケート結果(ハ)を参照)をチェック項目とし、条件付き検索をできるようにしたり、企業が社内の声や日常を日記形式で記すページがあったりするとよいだろう。アプリ利用者が企業をよく知ることができ、魅力を感じやすくなるといった効果が期待できる。

最後に地域おこし協力隊制度の導入を提案する。地域おこし協力隊は他の市町村でも導入されているところが多くあり、非常に満足度の高いものとされているため期待ができるのではないかと考えた。

6　地域からの評価

12 月 6 日に袋井市企画政策課のスタッフが大学を訪問された際、実施したアンケート調査の中間集計を説明したが、興味深いとの評価を得た。

浜松市天竜区佐久間町における地域づくりの方策の研究
――佐久間地区の２集落を中心に――

指導教員：静岡文化芸術大学　文化政策学部　文化政策学科　准教授：舩戸修一
参加学生：鈴木晴香（本学科２年生）、中野七海、成田恭輔（本学科１年生）

「農村社会学」を研究する舩戸ゼミでは、一昨年度の浜松市天竜区佐久間町山香地区・城西地区の調査、昨年度の同町佐久間地区に引き続き、ゼミ生（2年生１人、1年生２人）とともに、2017年５月から2017年12月まで、同町佐久間地区の２つの集落（A集落、B集落）に赴き、そこに居住する住民に対して、現在の家族構成ならびに集落を出た子どもや孫について聞き取り調査を行った。また、この調査は、集落の共同作業や祭りにも、教員と学生たちで参加するという「参与観察」に基づいたフィールドワークでもあった。さらに2017年8～9月には、この２集落を出た子どもや孫に対して質問紙調査も行い、この子どもや孫の出身集落や実家に対する意識を明らかにした。

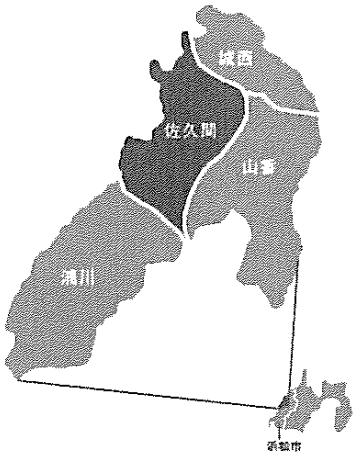
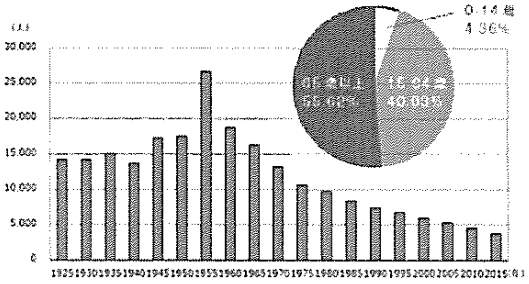


図1　浜松市 天竜区 佐久間町 佐久間地区の位置

浜松市天竜区佐久間町は、2005（平成17）年７月の浜松市との合併、2007年４月の政令指定都市への移行によって誕生し、４つの地区から構成されている（図1）。これまで佐久間町では、佐久間ダムの建設（1953年着工、1956年竣工）・久根鉱山（1902年操業開始、1970年閉山）・大規模林業など「近代資本集中」型の地域開発を進め、1955年には人口26,671人を数えた。しかし、ダム完成後、主要産業であった林業の不振あるいは鉱山の閉山によって人口が流出し始め、現在（2017年10月時点）の人口は3,560人であり、高齢化率は53%を超える（表1）。このように佐久間町は、外部資本型の開発による急激な人口増加とその後の大型資本による開発撤退や一次産業の不振による大幅な人口減少を経験してきた。



※ 1955年以前は旧佐久間町合併以前旧4町村の人口の合算である。
※ 2010年以降は浜松市に合併後の天竜区佐久間町の人口である。
※「国勢調査」より作成
表1　佐久間町の人口推移と人口構成（2016年10月1日時点）

昨今、日本の中山間地域では、若者世代の都市部流失、耕作放棄地の増大、獣害の増加などの問題を抱えている。このような過疎問題を背景に「限界集落」という言葉が注目を浴びている。この言葉は、農村社会学者である大野晃が提唱したものであり、「集落人口の半分以上を65歳以上が占め、社会的共同生活の維持が困難にある集落」を意味する。この限界集落の前半部の定義に注目すると、この論は、居住者の年齢構成を重視している。しかし、集落を出た子ども――「他出子」という――が近くに住み、足繁く実家や集落に帰り、様々な生活支援を行っているならば、集落はそう簡単に消滅しないであろう。そこで舩戸ゼミでは、集落の存続可能性は、「他出子」の居住場所・帰省頻度・集落とのかかわり方から判断すべきではないかと考え、佐久間地区のA集落、B集落の「他出子」だけでなく、集落を出た孫やひ孫まで、その実態やその意識を調査した。なお、本論文では、紙幅が限られているため、A集落についての調査結果ならびにその分析を述べることにする。

舩戸ゼミでは、第1に、A集落の全世帯を対象に聞き取り調査を行った。A集落は、標高約500～600mに位置し、現在、人口は17人、9世帯である。この調査では、A集落を出た子ども・孫・ひ孫について、①年齢、②居住場所、③実家に通う頻度の3点についてデータを集計した。第2に、聞き取り調査で判明した集落を出た子ども・孫全員に質問紙調査を実施した。質問内容は、集落行事・共同作業への参加意志、集落への帰郷意志などである。この2つの調査では、聞き取り調査に参加した住民を「親世代」、その子どもたちを「子ども世代」とした。

聞き取り調査によると、集落を出た子どもは12人、孫は17人、ひ孫は3人である。これらの人たちが集落に頻繁に通う「準村人」的な存在であると仮定すると、今後、A集落を支えていく人は、現在居住している住民と合計して49人になる。この4世代・49人の年齢構成を図示すると、15歳以上65歳未満の生産年齢人口が最も多い山なりのグラフになる。

次に、集落を出た子どもの居住場所である。この子ども12人のうち、佐久間町内2人、天竜区以外の浜松市4人、浜松市以外の静岡県西部(1)1人、愛知県東三河(2)2人、西部以外の静岡県1人、東三河以外の愛知県2人である。つまり集落を出た子どもの約80%が「佐久間町の近郊」(3)に居住している。

さらに、集落を出た子どもが実家に通う頻度である。この子ども12人のうち、年3~4回が1人、年5~6回が4人、年11回以上が7人である。一番多かった頻度は年11回以上であり、月に1回以上集落に通っており、年に1回も集落に通わない子どもはいなかった。集落を出た子どもは年に数回から月1回以上の頻度で集落に通っている。

以上の調査結果から、集落を越えて「家族」関係が維持されていると考えられる。また、親世代への聞き取り調査では、帰郷意志を持つ子どもは確認できなかった。

質問紙調査（回収率83.0%）によると、まず「将来、A集落に居住することを考えているか」という質問に対し、回答者10人中、2人が「居住を考えている」と回答した。この2人はいずれも親に帰郷意志を伝えていない。また、将来的にA集落への居住を考えていないと回答した8人に対して「将来、（A集落以外の）佐久間町に居住することを考えているか」と尋ねたところ、2人が「居住を考えている」と回答した。以上から将来的に佐久間町に帰郷する子どもは4人いるということになる。さらに「今後、A集落の実家に帰省する回数を増やせるか」という質問に対し、回答者10人中、9人が「増やすことができる」と回答した。

以上の聞き取り・質問紙調査の結果をまとめると「親世代の子どもの帰郷に対する認識」と「子ども自身の帰郷に対する意識」は必ずしも一致するわけではない。

集落存続には、集落を出た子どもや孫が「集落とかかわる」ことが重要になる。現在、子どもや孫は、ほとんど実家との関わりしかない。今後は「集落とかかわる」ために、以下2点、(1) 集落を出た子どもや孫が集落行事とかかわること、(2) 集落を出た子どもや孫が集落住民とかかわること、が求められる。(1)とは、集落の共同作業・祭典にかかわることである。現在、集落住民のみで実施している集落行事に子どもや孫を取り込むことにより、人手不足の解消、活気や賑わいの創出、文化の継承が期待できる。(2)とは、集落住民に交通手段を提供したり、買い物を代行したりすることである。中山間地域のムラは地縁・血縁などの人間関係を基盤としているため、集落住民同士の相互扶助が期待できる。以上の点を踏まえ、集落を出た子どもや孫の帰省回数を増やし、これらの人たちと集落住民との人間関係を築いていくことが不可欠である。

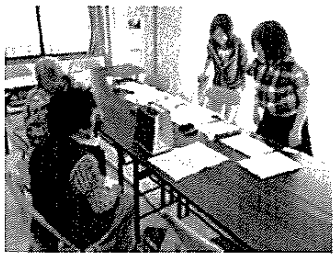
次年度の舩戸ゼミでは、集落を出た子どもや孫への聞き取り調査を実施する。子どもや孫が「集落とのかかわり」と深める機会を集落に提案し、集落存続の方策を集落住民と共に考えていきたい。

注

(1) 静岡県西部とは「磐田市・掛川市・袋井市・湖西市・御前崎市・菊川市・森町」である。

(2) 愛知県東三河とは「豊橋市・新城市・東栄町・豊根村・設楽町・蒲郡市・田原市」である。

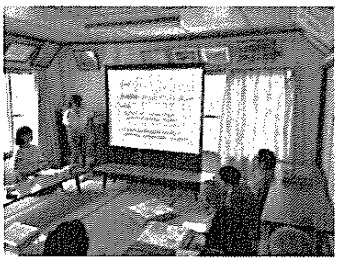
(3) 近郊とは「A集落から半径約40km圏内」を意味し、「車で2時間以内にA集落への移動可能な場所」である。



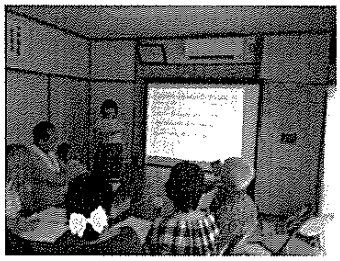
B 集落での聞き取り調査(5 月 28 日)

A 集落での聞き取り調査後の打ち合せ(7 月 9 日)

A 集落での共同作業(7 月 3 日)



A 集落での 1 回目の調査報告会(7 月 9 日)

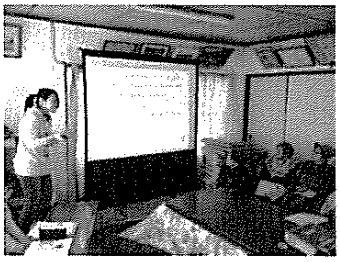


B 集落での 1 回目の調査報告会(7 月 9 日)

B 集落での共同作業(8 月 6 日)

B 集落での共同作業(8 月 6 日)

A 集落での聞き取り調査(8 月 26 日)



A 集落での 2 回目の調査報告会(12 月 3 日)

B 集落での 2 回目の調査報告会(12 月 3 日)

松戸ゼミによる佐久間調査を踏まえた、浜松の中山間地域づくりについてのシンポジウム
「まちむらリレーション市民交流会議」のチラシ（2018年2月6日開催予定）

浜松の中山間地域の可能性を考える。

2018
まちむらリレーション
市民交流会議
in浜松市天竜壬生ホール

2.6 火

［開場］12:00　［開演］12:30　［終演］16:45
［会場］浜松市天竜壬生ホール　［入場料］無料
［主催］浜松市、静岡文化芸術大学

浜松市役所　静岡文化芸術大学

［参加申し込み・お問合わせ先］
浜松市役所　市民協働・地域政策課
TEL：053-457-2243　FAX：053-457-2750
E-MAIL：shimokyodo@city.hamamatsu.shizuoka.jp
〒430-8652 静岡県浜松市中区元城町103-2

［お問合わせ先］
静岡文化芸術大学 地域連携室
TEL：053-457-6105　FAX：053-457-6123
E-MAIL：chiki@suac.ac.jp
〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1

2018
まちむらリレーション市民交流会議
in浜松市天竜壬生ホール

CONTENTS

［開会の挨拶］12:30-12:35
浜松市 天竜区長　岡部良之

［第一部］12:35-15:05
基調講演「『集落ドクター』から見た地域再生：世帯と家族は違う、子供は近隣にいる。」
一般社団法人トクノスクール・農村研究所 理事長
熊本大学名誉教授
徳野貞雄

徳野貞雄 氏

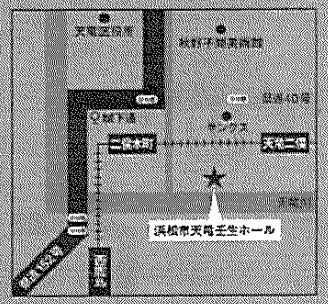
［第二部］15:15-16:00
講演「浜松市の中山間地域の集落を残していくために：松戸ゼミによる佐久間調査から」
静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 准教授
松戸隆一

［第三部］16:00-16:45
講演「浜松市の中山間地域施策について」
浜松市 市民協働・地域政策課 専門監
北條秀明

ACCESS

［公共交通機関］
●遠州鉄道「新浜松」駅より終点「西鹿島」駅下車
●遠州鉄道バス「二俣・山東行き」で「城下道」下車、徒歩10分
●天竜浜名湖鉄道「天竜二俣」駅より徒歩8分

［車でお越しの方］
コンビニ（サンクス二俣店）の交差点南下、130m先
駐車場147台（無料）



川での遊び文化の回復・創造による
人と川の良好な関係性の再構築

常葉大学社会環境学部山田辰美ゼミ
皆川友佑・山崎僚太郎

1. はじめに

河川は、主食を育てる水田の水源としてだけでなく、ふるさとの自然や懐かしい原体験の場として、流域住民と深い関わりがあった。川は大切な生活環境であるだけでなく、子どもの遊びや自然体験の場としても重要である。川遊びは身近な自然環境で実施できる貴重な直接体験であり、野外での遊びの少ない現代の子どもにとってかけがえのない学びや育ちを生み出す場であると考えている。つまり、川との触れ合いは子どもたちにとってふるさと原体験であり、生きる力の獲得となる貴重な体験の場であると考えている。

一方で、河川愛護や防災の意識の低下が危惧される背景には、社会環境の変化に伴う人と川の関わりの希薄化が原因として考えられる。特に、川で遊ぶ子どもの姿を見ることは少なくなった。そんな中、「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の助成研究として、静岡県の河川企画課が川遊びの回復をテーマとした上記の課題が提示された。

これまで子どもを対象とする川遊びイベントを企画・参加していた私たちは、この課題に取り組むことにした。川の現場で目を輝かせていた子どもの反応を知る者として、もっと多くの子どもにわくわくする川遊びを経験させたい。「自然大好き、ふるさと大好き」な子どもが増えるような人と川の良好な関係の再構築のために、具体的な提案を検討したい。

2. 目的と方法

県内各所で継続されている川の自然体験イベントの実態を、ケーススタディとして参加・調査した。近くに河川を有する小中学校や川イベントに参加している子どもと保護者から、川や川遊びの実態や意識を調査した。それらの結果から、子どもと川との関わりが希薄化している現状と原因を明らかにし、子どもが川で遊ぶ意義を検討したい。

① 川の自然体験イベントに自ら参加し、アクティビティを記録し、子ども達の反応を観察する。そこから川遊びの価値や意義を探る。

② 子ども、親、祖父母（保護者）の三世代にアンケートを実施し、川や川遊びに対する関りの実態や認識を把握する。そこから川遊びの再構築について課題を抽出する。

3. 研究結果①

平成 29 年 8 月～10 月にかけて 4 つの自然体験イベントに参加し、川や水に関するオリジナルのアクティビティを実施した。

1）里の楽校夏の子どもキャンプ：NPO 法人里の楽校が主催。四季折々に川や里の自然遊びや文化を実施。地域密着型の活動で、感性豊かな子どもの育成に努める。学生リーダーの養成にも力を入れている。河川財団の助成を受けるなど、約 20 年の実績がある。

リバートレッキング（里の楽校）

2）富士市水辺探検隊：富士市と県土木、常葉大学の共同で十数年継続している。身近な川を環境教育のステージにするための基礎調査から、オリジナルのアクティビティの考案し、地域で評価が高い。

富士山の湧水の秘密（富士市水辺探検隊）

3）富士宮市水の不思議探検隊：富士宮市の環境保全課が主催で、今年は 4 回目。水の特性に対してふしぎ体験を通して興味を持たせ、水への感謝や大切にする心を育てる。常葉大学の学生がおもしろい実験や劇にアレンジしている。薬品会社がスポンサー。

4）エコパ自然塾：エコパハウスが小笠山の自然を使った環境教育を毎年 7 回実施してい　る人気講座で十数年継続している。小学 1～6 年生が参加。森や水辺を中心に野生生物の学習や虫捕りや間伐などの野外体験を実施している。

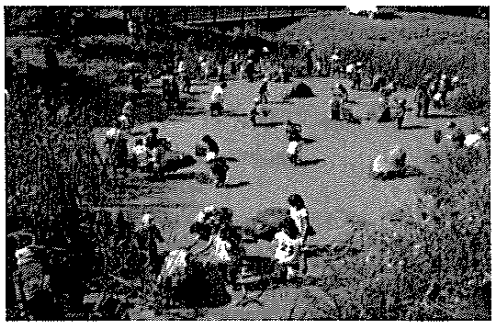
川べりの竹を使って水鉄砲作り（里の楽校）

5）川遊びの効果の検討

・多様な川遊びの展開があり、多くの子どもが熱心な取り組みを見せた。

・川が苦手な子どもも、仲間との交流や協力を通して、自然体験に強い興味を抱くようになった。

・直接体験を通して、強い感動、人間関係の形成、生物や命とのふれあいなどが得られ、「生きる力」の獲得に繋がっていた。



溜池のかいぼり（エコパ自然塾）

4. 研究結果②

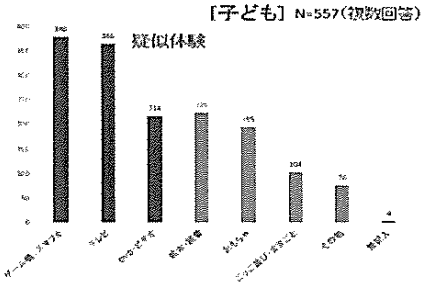
6 つの川遊びイベントの参加者、3 つの小中学校に対しアンケート調査を実施。自然体験イベントで 337 件、学校で 825 件、総数 1162 件の有効票の回収に成功。

1）休日、野外で遊ぶのは約2割の子ども。室内の遊びはゲームやテレビなどの疑似体験が多くを占めていた。（右図参照）

・外で遊んでいる子どもが22.5%

	1～3年生	4～6年生	中学生
外で過ごす	24.6%	22.3%	12.5%

普段の土日の遊びはどこで過ごすか[子ども]



家での遊びは主に何か

2）保護者・子ども共に遊べる川は近くにあると5割以上が答え、約7割の保護者や子どもが川で遊ばせたい、遊びたいと答えた。（右図参照）

	保護者	子ども
はい	65.6%	56.0%

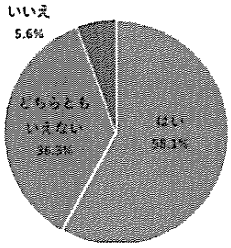
住んでいた場所の近くに遊べる川はあるか

	保護者	子ども
はい	69.7%	68.4%

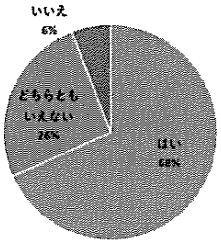
川で遊ばせたい(したい)か

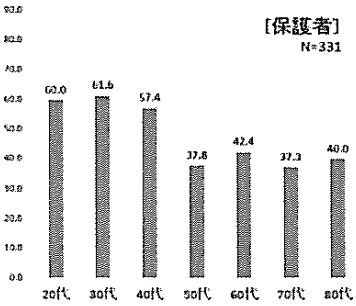
3）「川は危険だと思うか」という質問に、保護者は6割、子どもも約4割が川は危険だという認識を持っている。しかし一方で、7割の保護者が川で遊ばせたいという矛盾が注目される。保護者の「川は危険だと思う」回答数を年代別で見てみると、若い世代ほど川を危険と感じ、遊ばせたくないと考えている。高齢者ほど川は危険ではなく、子どもを遊ばせたいという考えが強くなる。(右図参照) この結果から、このまま時代が経過すると、川と人の関わりがより希薄化するという事である。

川は危険だと思う(保護者)

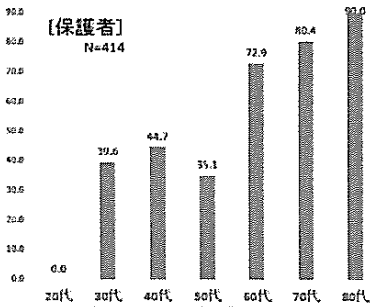


川で遊ばせたい(保護者)





川や川遊びは危険だと思うかで「はい」(世代別)



川で遊ばせたいかで「はい」(世代別)

4）子どもは「川は怖いところだと思うか」の質問に全体の平均で約4割が「はい」と答えているが、川遊びイベントを経験した子に絞ってみると、わずか約2割になった。このことから川遊び経験は川への恐怖意識を下げる効果があると言える。

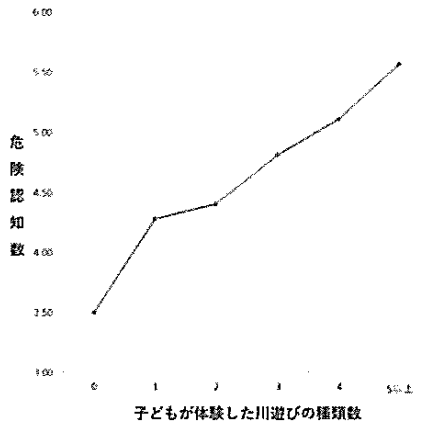
子どもへのアンケート

	全体	イベント	学校
はい	36.8%	25.7%	42.1%

川は怖いところだと思うか

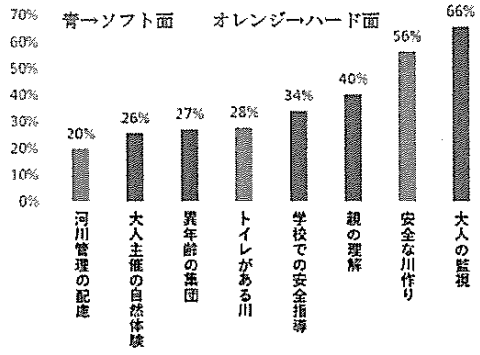
5）川遊びの経験の種類数と川の危険個所の認知数をまとめた。体験の種類が豊富になるほ

ど、危険性を多く把握できるようになっていくという相関が強くあるということがわかる。
（右図参照）



6）保護者に子どもに川遊びをさせるために、何が必要かについて回答をいただいた。河川管理上の土木工事が伴うようなハードな要望よりも、地域の人々の努力で実現できるソフトな対応が多く上がっている。川遊びの意義や必要性を地域社会で確認し合えることができれば、川遊びでいい子を育てる社会の構築も可能性が見えてくると考えられる。

問：子どもに川遊びをさせるために何が必要だと思うか



考察

現代の子どもは近くに遊べる川はあるが、室内で過ごす子どもが多いのは、テレビ・電子ゲーム・インターネットの普及などの社会環境変化の影響がうかがえた。川は現代の子どもの健全な心身の発達に貢献できる教育的なポテンシャルを多く持つ貴重なフィールドである。特にバーチャルな刺激によって無気力で意欲の低下した子どもの目を輝かすことができる遊びの宝庫である。

保護者・子ども共に高い割合で、川で遊ばせたい（遊びたい）と考えている。しかし危険意識から川から遠のいているのが現実のようだ。多くの保護者が川は危険だが遊ばせたいというジレンマを抱えている。また、川との関わりが希薄化している若い世代で、川への依存意識が低下している傾向が分かった。

川遊びできる安全な川作りが課題であるが、面的な整備は困難であり、現実的には地域の中で最適な場所を選択し拠点として整備することが考えられる。トイレや駐車場を持つ公民館や公園などが近くにある水辺が、多くの大人の監視が得られやすく好ましい。地域活動や子育て支援などで実績のあるNPO法人などが、週末や長期休暇を活用して、川の自然体験イベントを展開することが望まれる。そのための優れた川体験のアクティビティは各地に蓄積されている。

子どもは川遊びを経験することで、川への恐怖心が薄まり、親しみが強くなる。さらに、川遊びをしながら川の危険性を学び、危険予知能力を高めているようだ。自然との付き合い方を子どもは、体験を通して学んでいる。人と川の関係性の希薄化傾向を打開のため、川の持つ多面的価値を再認識すること以上に、まずは川遊び体験を通して川の魅力に触れることが重要なことである。子どもの心身の健全な発達に大切な糧となる川遊びの機会を増やし、たくさんの子どもに川遊びの楽しさを気付かせたい。

「川遊び」アンケート(保護者版)にご協力をお願いします

この度は私共の活動に参加していただき、ありがとうございます。川遊びなどの川文化や、川と子どもの関係について、調査研究をしています。今後の活動の参考にしたいため、アンケートへのご協力お願いします。当てはまるもの（AやBなど）に丸をつけて下さい。（＿＿）には自由にお書き下さい。

1．あなたについて教えて下さい。　（性別：A.男　B.女）　（年齢：＿＿歳）

2．ご自身が子どものときによく(月に1・2回以上)川遊びをしましたか？
A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

3．川でどんな遊びを体験したことがありますか？(該当するものすべてに○、特に該当は◎)
A.水浴び・飛び込み・水泳　B.水切り・石投げ　C.砂場遊び　D.ままごと　E.石積み・石拾い
F.笹船・木流し　G.魚捕り・釣り　H.虫取り　I.川渡り・飛び石　J.木登り　K.鬼ごっこ
L.その他(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

4．川遊びはとても楽しかったですか？　A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

5．住んでいた場所の近く(歩いて遊びに行ける所)に川はありましたか？
A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

6．子どもを川で遊ばせたいですか？　A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

7．川や川遊びは危険だと思いますか？　A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

8．あなたが考える川や川遊びの危険性とは何ですか？(該当するものすべてに○、特に該当は◎)
A.深場　B.流れ　C.広さ　D.草むらや藪　E.ごつごつした石の河原　F.川底や堤防が滑る
G.へび・かえる　H.人の目が届かない　I.堤防や落差工などの人工構造物　J.濁り・汚れ
K.その他(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

9．現代の子どもに川遊びをさせるために何が必要だと思いますか？
A.安全・安心な川作り　B.トイレがある川の遊び場の整備　C.大人の監視の目　D.親の理解
E.学校での安全指導　F.大人主催の自然体験会　G.異年齢の遊び集団　H.河川管理上の配慮
I.その他(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

10．子どもが川で遊ぶことについて、自由にご意見をお書きください。

11．現在の川について自由にご意見をお書きください。

アンケートご協力ありがとうございました。

「川遊び」アンケート(子ども版)にご協力お願いします

管大学山田民美ゼミでの調査研究の参考にしたいため「川遊び」に関するアンケートへのご協力お願いします。

当てはまるもの（AやB）に丸をつけてください

1．あなたについて教えて下さい。　（性別：　A.男　B.女　）　（学年：＿＿年）

2．あなたは川や川遊びが好きですか？　A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

3．あなたがやったことのある川遊びは何ですか？
A.水浴び・飛び込み・水泳　B.水切り・石投げ　C.砂場遊び　D.ままごと　E.石積み・石拾い
F.笹船・木流し　G.魚捕り・釣り　H.虫取り　I.川渡り・飛び石　J.木登り　K.鬼ごっこ
L.その他(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

4．住んでいた場所の近く(歩いて遊びに行けるところ)に遊べそうな川はありますか？
A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

5．「川で遊んではいけない」と言われたことはありますか？　A. はい　B. いいえ

6．5の質問で「はい」と答えた方に聞きます。誰に言われましたか？
A. 親　B.学校の先生　C. 近所の人　D.友達・上級生　E.警察の人　F.その他(　　)

7．ふだんの土曜・日曜の過ごし方で外遊び(野外)より家遊びが多いですか？
A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

8、家での遊びは主に何ですか？（あてはまるものすべてに○、特に好きな遊びに◎をつけて）
A.ゲーム機・スマフォ　B.テレビ　C.DVD・ビデオ　D.おもちゃ　E. ごっこ遊び・ままごと
F.絵本・読書　G.その他(　　)

9、川は怖いところだと思いますか？
A.はい　B.どちらともいえない　C.いいえ

10.川で怖いのはどんなところですか？あてはまるものすべてに○をつけて。
A.深い場所　B.速い流れ　C.広さ　D.草むらや藪　E.ごつごつした石の河原　F.にごり・汚れ
G. へび・かえる　H.大人がいない　I.コンクリートや鉄などの構造　J. 川底や堤防がすべる
K.その他(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

11. 川がどのようになるとうれしいですか？

アンケートご協力ありがとうございました。

成果報告書

販路に感動！白葉茶
～白葉茶の販売促進プランの策定～

静岡産業大学　情報学部　柯ゼミ
指導教員：准教授　柯麗華
参加学生：野村なつみ、岸山洸気、川井香澄
萩田愛、宮本一将、重井アユミ
コウケツミノル、嶋津樹夢、増田祥多

１．要約
マーケティング戦略の観点から訪日外国人観光客のメイン層である中国人にターゲットを絞り、彼らの観光ニーズについて独自のアンケート調査を実施し、その結果に基づき、中国人の独特な購買行動に適合する高級健康茶である白葉茶の販売促進プランを考案した。すなわち、「白葉茶を静岡のお土産化する」のがこの販売促進プランの最大の特徴であった。

２．研究の目的
2017年の訪日外国人観光客の数は2,869万人で、全体の消費額は4兆4,161億円で、年間値の過去最高となった。そのうち中国人の総数（全体の4割）と１人当たり旅行支出ともトップであった。そこで、この研究は、静岡県の訪日中国人誘客に向けた白葉茶の販売促進プランを提案し、訪日の主役である中国人を積極的に誘致し、県内での滞在日数や時間を大幅に延長させ、爆買いと爆体験へと誘導し、地域の活性化につなげることを狙いとしている。

３．研究内容
知名度が極めて低い白葉茶のプロモーション戦略に力点を置き、白葉茶を静岡の代表的なお土産の1つとして訪日中国人観光客に爆買いしてもらう方策を研究してきた。この研究は、「訪日中国人観光客のアンケート調査」および「白葉茶の販売促進プラン」を柱として行った。フェーズⅠで、訪日中国人観光客のニーズを知るため、アンケート調査および白葉茶の試飲調査を平行にして実施した。そして、フェーズⅡで、アンケート調査の結果に基づき、マーケティング戦略の４Pの分析手法に従って、白葉茶の販売促進プランを考案した。

４．研究の成果
（１）当初の計画
研究は、ほぼ当初の計画の通りで進めた。変更点は、まず、白葉茶の資料が少ないため、情報収集に多くの時間を費やした。そして、アンケート調査は、2回に分けて実施した。最初に、日本人に限定して白葉茶の知名度やブランドイメージに関するアンケート調査を実施し、100枚のアンケート表を集めた。そして、白葉茶をPRするために、大学、在日中国人がよく集まる集会場（大学の研究会、飲食店、体育館）、富士山静岡空港などで、日本人含む外国人に白葉茶の試飲及びアンケート調査を実施し、100枚のアンケート表を集めたことである。

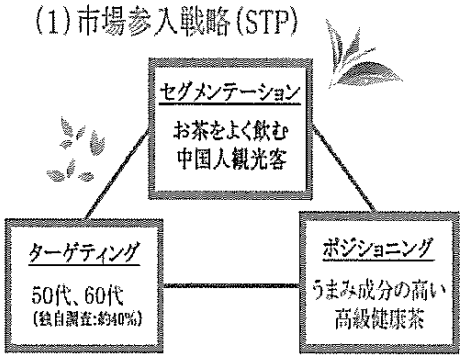
（２）実際の内容（予定通り）
企画書は、白葉茶のSWOT分析、マーケティング戦略、企画書の特徴という3つの部分に構成されている。

1. 白葉茶のSWOT分析

機会	脅威
中国人観光客	人気のお土産(飲料)
強み	**弱み**
健康促進	高価格　渋み

2. マーケティング戦略

(1)市場参入戦略(STP)



(2)マーケティング戦略

①製品戦略

- 白葉茶の独自性
- 希少性、付加価値の高い健康茶
- made in Japanの高級お土産

疲労回復　リラックス効果
健康効果
美肌美白効果　デトックス効果

②価格戦略

100g
9260円(税抜)

- 需要志向型の価格戦略
  - 中国で物価の上昇や健康志向の向上
  - お茶の販売価格が高騰
- 競争志向型の価格戦略
  市販価格と中国高級緑茶の競争

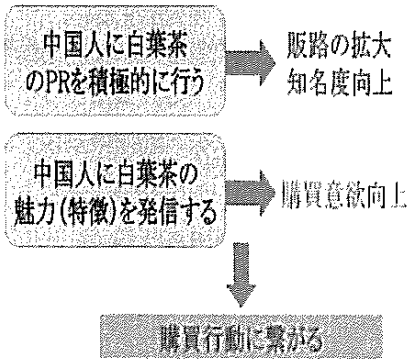
③販売戦略

- 創意工夫:試飲販売
- 販売チャネル:お茶の専門店、空港の売場等
- 手法:高級感や貴重価値の演出

④プロモーション戦略

中国版のソーシャルメディアの活用
- 新浪微博(シナウェイボー):Twitter
- 微信(ウィーチャット):LINE
- 人人網(レンレンワン):Facebook
- QRコードで情報発信

3. 企画の特徴



（3）実績・成果と課題

①実績・成果

まず、7月から9月までの間に、白葉茶の情報収集や基礎知識の学習を行いながら、日本人に白葉茶の知名度やブランドイメージに関する調査を実施した。しかし、調査の結果をみると、静岡県在住者の9割の人が白葉茶の単語も意味も分からなかったと答え、白葉茶の知名度が極めて低いことがわかった。そして、前島茶園で白葉茶の茶園見学し、栽培や販売方法についての現地調査を実施してから、富士山静岡空港や外国人集まる場所で、白葉茶の試飲及びアンケート調査を実施した。また、アンケートの集計と企画書の作成に専念し、12月中旬に白葉茶の販売促進プランを静岡県のお茶研究会の専門家達に発表し、アドバイスをいただいた。その後、専門家の指摘内容を中心に企画書を再度見直し、特に販売チャネルやプロモーションについて修正した。

研究成果の1つ目としては、白葉茶のPRに寄与した。白葉茶のことに全く興味や関心のない日本人や外国人にアンケートを実施したため、白葉茶に関心を持ち、私たちが提案した販売促進プランに興味を示し、購入したいとの評価を得ることができた。そして、2つ目は、白葉茶の販売促進に少し貢献した。試飲した人による積極的なSNSでの写真投稿により、白葉茶を購入した人や購入しようとした消費者ニーズが生まれ、白葉茶の売上の増加に少し貢献した実績があったようである。

②課題

白葉茶の販売促進に関する最大の課題は、知名度や認知度の低さである。行政や業界全体に一元になって、積極的なプロモーション活動の展開が不可欠であると強く実感した。また、訪日中国人観光客をメインターゲットにするならば、中国でのPR活動や日本での販売店による中国語への対策も課題となる。

（4）今後の改善点や対策

白葉茶に関する研究活動は、9月の後期の講義開始から開始した。しかし、ゼミ生全員は白葉茶についての知識がゼロに近く、しかも関連の資料が少ないため、情報収集に多くの時間を費やした。また、白葉茶の試飲をしてからアンケート表を集めるにも多くの時間を要した。改善点としては、研究のスタート時期を早めて、白葉茶の関係者にもっと多くのインタビューを実施し、完成度のもっと高い企画書を仕上げるべきだと感じた。

5．地域への提言

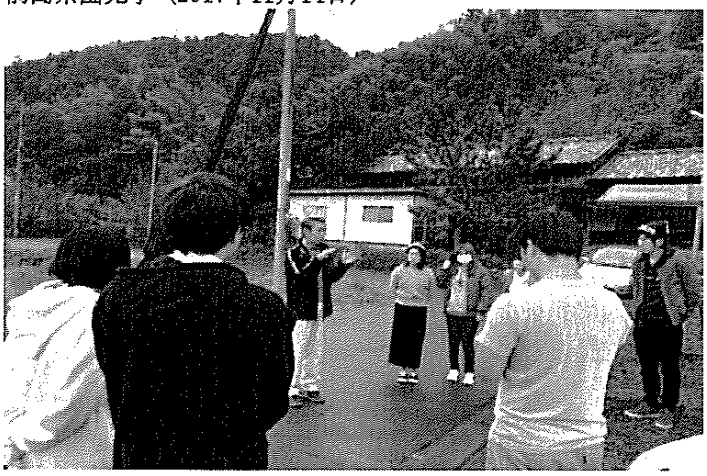
まず、白葉茶の知名度を上げるのが第一歩である。日本国内では、県内や国内の様々なイベントに積極的に参加し、試飲活動を通じて白葉茶の強みをPRする必要がある。また、中国、香港や台湾などの中華圏では、WeChatやLINEなどのSNSを大いに活用し、白葉茶の情報発信を行うことも欠かせない。こうしてプロモーション活動を持続的に行えば、付加価値が高く、健康促進効果が高い白葉茶の販売促進につながると考えられる。

6．地域からの評価

日本人学生や留学生の感性で、新しい発想での中国人観光客を誘致し、地域の活性化につなげる取組みに一定の評価を得ることができた。例えば、白葉茶のターゲットを訪日中国人に絞ったことにより、販売チャネルの構築やプロモーション活動の方向性が見えたと白葉茶の関係者に評価された。また、この地域連携活動は、中日新聞にも注目され、取材を受けてから後日記事として報道される予定である。

参考資料　研究風景

前島茶園見学（2017年11月14日）



富士山静岡空港での白葉茶試飲とアンケート調査の様子（2017年11月21日）

静岡市におけるＳ型デイサービスの実態に関する調査研究

常葉大学 健康科学部　鈴木里砂ゼミ
指導教員：助教 鈴木　里砂
参加学生：工藤　雄大、石川　愛莉、黒木　楓馬
細谷　麻夏，大石　嵩留，坂田　健太
杉浦　咲子，中西　拓，　倉元　貴就
杉山　琴野，中原　凌我，吉野　滉志

1. 要約

本研究は，静岡市内の「S型デイサービス」の利用者とボランティア高齢者を対象として，高齢者のQOLの阻害因子となるフレイルの危険性を測るフレイルチェックを実施し，「S型デイサービス」に関わる高齢者の現状や傾向を把握するとともに，「S型デイサービス」の今後のフレイル予防へつなげる可能性について提言した.

2. 研究の目的

静岡市における「S型デイサービス」は地区社会福祉推進協議会主催，地域のボランティア等により運営されるという全国的にも注目される地域主体の高齢者対象のミニデイサービス事業である.これは，地域包括ケアシステムの互助の部分を担うものであり，高齢者が住み慣れた地域で生活を継続するために重要となる取り組みである．現状では，「S型デイサービス」利用者の健康状態については調査されておらず，その利用効果などについての検討は客観的に実施されていない.

本研究では，高齢者のFraility（フレイル：虚弱）に着目した．フレイルとは，「加齢とともに精神活力が低下し生活機能が障害され、心身の『虚弱』が生じている状態」[1]である．しかしながら，フレイルは，適切な介入・支援により、生活機能の維持・向上が可能であり，早期の発見と介入が重要である．本研究ではこのフレイルについて，「S型デイサービス」利用者の状況を先行研究の全国値およびボランティア高齢者と比較検証した．フレイルの早期発見、早期介入のための，利用者およびボランティア高齢者のフレイル予防の観点からみた傾向について報告し，「S型デイサービス」での実施内容の提案を実施した.

3. 研究の内容

「S型デイサービス」利用者に対し，フレイルの統一された評価基準はなく、Fried らの評価基準 が一般的に用いられており，体重減少，主観的疲労感，日常生活活動量の減少，身体能力の減弱，筋力の低下の 5 分野についての項目が採用され，調査されることが多い．今回は，東京大学高齢社会総合研究機構の飯島勝矢教授によって考案された「イレブンチェック」と「指輪っかテスト」，「総合チェックの運動項目」[1]を用い，「S型デイサービス」の利用者のフレイルの危険性の現状を健康状態の指標とし用いた.

3-1. 静岡市役所地域連携部との打ち合わせ（2017年9月5日）

静岡市地域包括ケア推進本部の皆様と打ち合わせを行い，調査を体力測定の中でもフレイルに着目した内容とすることを決定した.

3-2. フレイル予防講演会への参加（2017年9月14日）

静岡市様主催のフレイル予防講演会に参加し，東京大学高齢社会総合研究機構の飯島勝矢教授の講演を聴講し，フレイルおよびイレブンチェックについて学習した.

3-3. S型デイサービスX会場見学（2017年9月28日）
S型デイサービスの事業内容を体験するため，X会場にご協力いただき見学を実施した.

3-4. S型デイサービスA会場（2017年11月2日）打ち合わせと測定実施（2017年11月16日）
A会場対象者：利用者群は，平均79.2歳（男：女＝1：11　計12人），ボランティア群は平均73.4歳(男：女＝2：8　計10人）であった.

図1．A会場での測定

図2．B会場での測定

3-5. S型デイサービスB会場との打ち合わせ（2017年11月7日）と測定実施（2017年11月21日）
B会場対象者：利用者群は，平均83.0歳（男：女＝1：11　計12人），ボランティア群は平均71.6歳(男：女＝2：8　計10人）であった.

3-6. 調査内容
3-6-1. アンケート調査（イレブンチェック）
アンケート項目は11項目であり，Yes，Noで回答することとした.
項目内容は以下とした.
1) ほぼ同じ年齢の同性と比較して健康に気を付けた食事を心がけていますか
2) 野菜料理と主菜（お肉またはお魚）を両方とも毎日2回以上は食べていますか
3)「さきいか」、「たくあん」くらいの固さの食品を普通に噛み切れますか
4) お茶や汁物でむせることがありますか
5) 1回30分以上の汗をかく運動を，週2日以上、1年以上実施していますか
6) 日常生活において歩行または同等の身体活動を1日1時間以上実施していますか
7) ほぼ同じ年齢の同性と比較して歩く速度が速いと思いますか
8) 昨年と比べて外出の回数が減っていますか
9) 1日に1回以上は、誰かと一緒に食事をしますか
10) 自分が活気に溢れていると思いますか
11) 何よりまず、物忘れが気になりますか
項目1-2) が栄養，3-4)が口腔，5-7)が運動，8-9)が社会参加，10-11)がこころを調査する項目であった. 4)，8)，11)がNo回答で赤のシール，そのほかはYes回答で青のシールを貼った.
3-6-2.「指輪っかテスト」
被験者自身の母指と示指で輪っかを作成し，下腿を囲んだ際に囲めるかどうかを記録した. 隙間が出来る場合は赤のシール，囲めない，ちょうど囲める場合は青のシールを貼った.
3-6-3. 総合チェック運動項目
握力，下腿周径，立ち上がりテスト，体組成計による筋量の4項目である.
・握力，下腿周径は，利き手は食事で使用する側の上肢，利き足はボールを蹴る側の下肢での測定とした.

・椅子立ち上がりテストについては，38.0cm椅子を用い，利き足にて立位を取ることの可否を測定した．立位可能の場合は，青のシール，不可能の場合は赤のシールを貼った．
・体組成計による筋量は，タニタ社製InnerscanV50にて測定した．

3-6-4. 分析方法

アンケート調査結果については，回答割合（Yes，No）を数値化し，先行研究の結果との比較を行った．また，体力測定項目については，統計ソフトStatcelを用い，S型デイサービス参加者群と，ボランティア者群について対応のない２群のT検定を実施し群間比較を行った．また，女性のみ抽出し，年齢別全国平均値とのone-sample-T検定を行った．

4. 研究の成果

4-1. アンケート調査の結果（指輪っかテスト，食習慣，社会参加），総合チェックの椅子立ち上がりテストの結果を以下に示す．

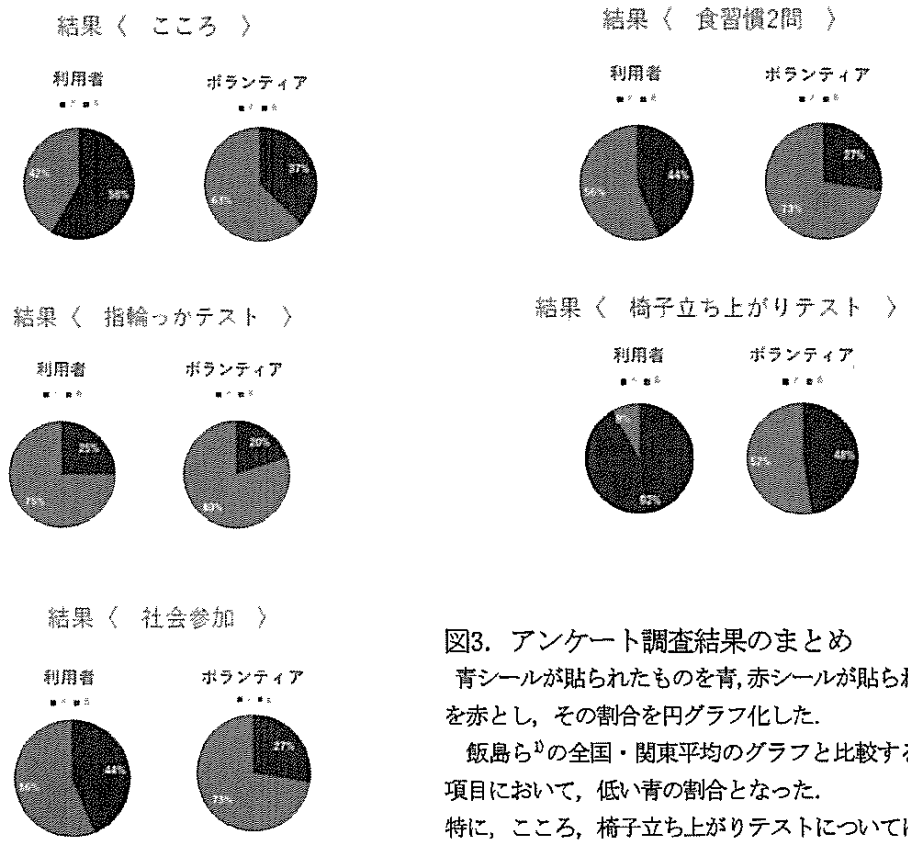


図3. アンケート調査結果のまとめ

青シールが貼られたものを青，赤シールが貼られたものを赤とし，その割合を円グラフ化した．

飯島ら[1]の全国・関東平均のグラフと比較すると，全項目において，低い青の割合となった．

特に，こころ，椅子立ち上がりテストについては，利用者の半数以上が赤となっていた．

（赤：濃黒色，青：淡灰色）

4-2. 体力測定項目の結果

握力は，ボランティア（A会場20.0±10.4kg：B会場23.5±6.1kg），利用者（A会場18.9±3.0kg：B会場13.9±4.6kg），全身筋量はボランティア（A会場37.4±8.0kg：B会場35.1±5.7kg），利用者（A会場33.1±4.6kg：B会場31.1±3.5kg），非ききき足筋量はボランティア（A会場7.2±1.8kg：B会場6.7±1.5kg），利用者（A会場6.7±0.8kg：B会場5.9±0.6kg），
下腿周径，ボランティア（A会場34.5±3.3cm：B会場34.2±3.1cm），利用者（A会場34.3±3.1cm：B会場31.8±3.1cm）であった．

4-3. 研究の実績・成果と課題，実際の内容

1) ボランティア群と利用者群の違いについて

年齢，握力，全身筋量はボランティア群の方が有意に高い数値を示した．

2) 全国平均との違いについて（男性は少数であったため女性のみ比較した．）

ボランティア，利用者群とも握力は全国平均より低い傾向にあった．筋量は利用者群のみ有意に低く（$p=0.05$ $p<.05$））ボランティア，利用者群とも周径は有意に高い数値（$p=0.002$, $p<0.001$, $p<.05$）を示した．

3) 会場別の全国平均値との違い

A会場：利用者の握力は全国平均値より有意に低い値（$p<0.001$, $p<.05$）を示した．ボランティアの握力は全国平均より低い傾向にあったが有意差はなかった．ボランティア，利用者の周径は全国平均より有意に低かった（$p=0.038$, $p=0.001$ $p<.05$）．

B会場：全体的に周径以外は全国より低い傾向にあった．ボランティア，利用者の握力は全国平均より低い傾向にあったが有意差はなかった．周径に関しては，利用者は全国平均より有意に高かった（$p=0.014$, $p<.05$）．

4) アンケート結果については，飯島ら[1]の報告では，年齢層が違うため単純な比較は困難であるが，ある程度の目安として考えても今回の結果は低い傾向にあることを示していた．また，S型デイサービス利用者の半数以上が，椅子からの立ち上がりが困難であり，体力測定項目の全身筋量の低下との関連が示唆された．また，「こころ」（活気や物忘れの心配）に心配を抱えている可能性が高く，この部分への支援も必要と考えられる．

5) 実際の内容

B:一部修正（静岡市との協議の結果，フレイル調査を中心に調査内容を変更した．）

4-4. 今後の改善点や対策

本研究では，2箇所のS型デイサービスでの調査に留まった．静岡市内には200箇所以上のS型デイサービスが実施されており，各所で特色のある取り組みがされている．フレイルチェック調査の箇所を増やし，取り組みの特徴による違いや，地域差を明らかにすることで，どのような活動に力を入れて行ったら良いかということを提言できると考えられる．

また，フレイルチェックは自身のフレイル度に気づき，生活や意識を変革していくことも目的とされている．継続して，同じS型デイサービスで調査することで，各個人の変化や予防につなげていくことができると考えられる．

5. 地域への提言

S型デイサービス利用者，ボランティア群とも，握力に関しては，有意差は出なかったが，全国平均よりも低い傾向にあり，周径は有意に高かった．立ち上がりテストの結果も踏まえると，体幹などの身体支持性の弱化の可能性が高く，体幹を向上させるようなトレーニングを組み込むことが望まれる．また，握力に関しては，先行研究よりフレイルの進行と握力は関連が強いとの報告が多く，利用者，ボランティア群ともフレイルのリスクが高い可能性が高い．握力は全身的な体力の指標とも言われるため，全身運動につながるような活動も検討する必要があるであろう．

謝辞：静岡市地域包括ケア推進本部　木下様，鈴木様をはじめとした皆様，伝馬町会場，森下会場の皆様に感謝申し上げます．

引用・参考文献

1) 飯島 勝矢：口腔機能・栄養・運動・社会参加を総合化した複合型健康増進プログラムを用いての 新たな健康づくり市民サポーター養成研修マニュアルの考案と検証 （地域サロンを活用したモデル構築）を目的とした研究事業 ，東京大学 高齢社会総合研究機構 ，2016, 03

2) 谷本芳美 他：日本人筋肉量の加齢による特徴，日老医誌，52-57，2010

3) 解良武士 他：都市在住高齢者における1年後のフレイル進展の心身機能的要因の検討，理学療法科学，549-555，2015

4) 解良武士 他：2年後にフレイルから改善した都市在住高齢者の心身機能の特徴，理学療法学 第42巻 第7号，586-595，2015